

「またか！ いったい誰なんだよ？」

その怒鳴り声は、ぼくの小学校生活での最大の楽しみ——給食の時間が始まって五分ほどたったときに教室の前方から聞こえた。

もつとも、その時点で、ぼくはすでに給食の八十パーセントを食べ尽くしていたけれど。

怒りに震えた声で叫んだのは、かめじまゆうさく 亀島佑作だった。

亀島佑作は、三年生のときから今までずっと同じクラスになった数少ない男子だ。亀島の成績は、ずば抜けていい。もちろん、キムウナ 金銀河には負けるが……金銀河がクラス一位なら、亀島は二位をキープしている。先生からの質問にもソツなく答える。

身長は百七十センチを少し越えるくらい。ふるろうしょうたろう 不老翔太郎とほぼ同じだろうか。けれど、肩幅はがちりと広い。さすが、地元のスイミングスクールに通って、五年生のときに県内一位の成績をたたき出しただけのことはある。優等生にして、スポーツマン。女子からも、モテないはずがない。

亀島の家は歯医者だった。といっても、虫歯を治してくれる歯医者ではない。セレブな予約客オンリーの「美容歯科」という歯医者らしい。

同じクラスで四年目になるというのに、亀島とぼくが会話をした記憶はない。亀島のほうから、ぼくを避けているような気配がある。ぼくだって、なんとなく亀島佑作には近寄りがたい雰囲気を感じていた。それはべつに、亀島の家が、ぼくの大嫌いな「歯医者」だから、というわけじゃない。

正直に白状しよう。三年生で同じクラスになつてからずっと、亀島佑作という男は、ぼくにとつて、ずっと「うらやましい」存在だった。

亀島はいつもはおとなしくて物静かで、大きな声を上げた姿なんて見たことがない。

そんな亀島が——先週末の突発的な席替えで、教壇の真ん前という席になった——給食の最中にこんな声を上げたのだ。何か「とてつもない」異常事態が起こつたに違いない。

ぼくは、牛乳を飲み干し、すぐ隣の不老翔太郎を見やった。

不老は、音も立てずに「にらと卵のスープ」を、わざわざスプーンですくって一口ずつ飲んで——食べていた。

「なあ、不老——」

「この『にらたまスープ』は、冷めても味が落ちないね。この献立メニューを作った栄養士さんは、実にいい仕事をしていると思うよ。前の学校では——」

「そんなことを言いたいんじゃないだよ」

「ご飯だろうとパンだろうと、必ず牛乳が出てくるのは、おそらく日本全国共通だろう。けれど、これは改善したほうがいいと思わないかい？ もちろん、牛乳が日本において数少ない『自給率百パーセント』の食材で、タンパク質やカルシウムといった栄養価が高い。しかし、白いご飯を食べれば、やはり食後には熱い緑茶をいただきたいとは思わないかね」

始業式から三週間ほど経つ。そろそろゴールデン・ウィークになろうとしている。けれど、まだ、こいつのしゃべりに慣れることなんてできない。「かね？」って何だよ、「かね？」って。おまえは日本語吹き替え版のアメリカ映画の登場人物かよ——などと喉元まで出かかっていたけれど、もちろん口に出さないだけの分別は、ぼくにもある。

「緑茶の自給率も九十パーセント以上だけど……いや、緑茶にした場合、タンパク質、カルシウム、そして摂取カロリーといった栄養価の問題が出てくるのか。すると献立全体を考え直さないといけない。つまり、もしも牛乳の代わりに上質の玉露を出した場合、今のメニューを現在の給食費で維持することは困難で……」

不意に不老は手を止めて、箸を置くと空中をにらんで、考え込み始めた。

また、この男の習性が出た。

人の話を聞かない。

周りの空気を読まない。

自分の思いついたことしか言わない。

自分の興味のあることにしか反応しない。

いつたいたいどうしたら、こんなにもねじれ、ゆがみ、屈折した性格の人間になれるのか、つくづく疑問だ。

にも関わらず、この男は嫌われることがない——特に女子に。ほんとうに、男子の一人として、つくづく腹が立つではないか。

不意に女子の声が不老の深い深い思索を邪魔した。

「でも不老君、この『ミートボールとブロッコリーの炒め煮』は、カロリー高いよ。太りそうだと思うわない?」

と言いながらも、そのミートボールをおいしそうに口に放り込んだのは、金銀河だ。

先週の金曜に、席替えをしたばかりだった。萱場千種先生かやばちぐさの突発的な思いつきとしか考えられないが、先生にはよくあること。席替えはくじびきで行なわれたが、そのお陰で、うれしいことに、ぼくは金銀河の斜め前の席に決まった。

そして、どういうわけか、ぼくのすぐ後ろ——つまり、金銀河の隣——が不老翔太郎の席になった。

ぼくたちのクラスでは、男女三人ずつ、六人で一つの班を作る。男女ちょうど五人ずつのクラスなので、全部で五班できる。

その六人の班で机を移動させて「島」を作り、給食を食べることになっていた。「ねえ、不老、さつき亀島が——」

ぼくは完全に不老に黙殺された。

「給食の献立というのは、ちゃんと必要摂取カロリーも栄養素のバランスも考慮した上で作られているはずなんだ。しかしね、実に奇妙なことがあるんだよ。文部科学省の『学校給食摂取基準』では、なぜか炭水化物の摂取基準が盛り込まれていない。これは実に奇妙だと思わないかい?」

「さあ、べつに思わないけど……」

「加えて、この『摂取基準』には法的拘束力がないんだよ。従って、各自治体ごとに一回の給食における摂取カロリーが異なるようだ。給食の献立メニューを作成する管理栄養士の『好み』が反映する場合もあるらしいよ。確かに、今日のメニューは高たんぱく高脂肪だと言わざるを得ない。それに——」

不老はまつすぐにぼくを射貫くような視線を向けた。

「君は、今日もまた、ご飯をおかわりしたね。しかも二回も。明らかに炭水化物の摂取過多だし、摂取カロリー・オーバーだ。君の体型に関しては、君自身がよく理解しているはずだと思うが……」

「はいはい、忠告どうもありがとうございます」

無然として、ぼくはデザートフルーツミックスゼリーに手を伸ばした。

「おっと、僕の忠告をまったく聞いていないようだね」

瞬く間、とはこのことを言うのだろう。いつの間にか、不老の右手に、ぼくのフルーツミックスゼリーがあった。不老の長い腕に、ぼくの太くて短い腕が届くはずがない。

「これは代わりに僕が摂取するよ。脳の活動には糖分が必要だ。さて、この低コストでこれだけのメニューを考え、長年にわたって実施されてきた学校給食は、改善の余地があるにせよ、たいへんにありがたいものだ。僕は高く評価したいね。もっとも、君のような良家のお坊ちゃんにはおわかりにならないだろうけど」

一言どころか二言も三言も、いや以上、よけいなことを言うのだ、この不老つてやつは。

会話を割り込んできたのは金銀河だった。

「ねえ、不老君。わたしたち女子は、男子の知らないところで苦労しているんだよ。

もつと栄養のバランスに気をつけて給食を作って欲しいな」

「ほほう、申し訳ないけれど、それは『苦労』ではなくて、いわゆる『徒労』なんじゃないかな？」

まったく、何てことを金銀河に向かって言うんだ。何度も何度も疑問に感じているが——ほんとうにどういう脳味噌の構造をしているんだ、不老翔太郎って男は？

「銀河さんがいかにダイエットしようとして、太ろうと痩せようとして、ぼくたち——いや、少なくとも僕は一向に気にしないけれどね。そもそも『太っている』と『痩せている』の境界線は何なんだい？ いや、この御器所君が『太っている』のは間違いない事実だよ。ちなみにいわゆる『肥満度』を計る『BMI』によれば——」

さすがに我慢の限界だ。ぼくは口を挟んだ。

「BMWだかベンツだか知らないけど、はつきりわかりやすく事実を言うよ」

「ほほう、御器所君に『わかりやすく』説明できる能力があるとは驚きだ。ぜひ拝聴したい」

不老はもみ手をするかのように両手を握り、ぼくに身を乗り出してきた。

胸の奥の心臓に近い辺りで「ぐぬぬぬぬ……」という声なき声を響かせながら、ぼくはゆつくりと言った。

「間違いのない事実。それはつまり——不老翔太郎は、ウザイ」

約十五秒の沈黙——

不老は弾けたように爆笑した。

「御器所君、君にそんなユーモアのセンスがあつたとは、驚きだよ！ まさか君の口から、陳腐な『ウザイ』という単語を聞こうとは、まったく仰天だ。実に傑作だ！」

いや、ユーモアじゃなくて、事実を言っただけなんだけれど。

妙に顔面の毛細血管に血流が増えるのを実感する。たぶん、ぼくの顔は「こいのぼり」の「ひごい」以上に真っ赤に染まっていたことだろう。

「でも、そういう正直なところが、御器所君の長所だと思うよ。不老君は鈍感なの！」
思いがけず、金銀河にフォローされてしまった。さらにぼくの顔面は赤みを増したことだろう。心臓の鼓動も早くなる。

クラスでナンバー・ワン、いや学年でナンバー・ワンの美人にして優等生に、こんな言葉をかけられて、ドキドキして緊張しない男子がいるだろうか。

それを悟られないよう、ぼくはすぐに空になった食器の載つたお盆を持って、立ち上がった。教室の前に移動した。

かごのなかに食器を種類別にわけて入れる——ぼくが最初に給食を食べ終わつたらしく、かごのなかはほとんど空だった。

ちら、と最前列の班の亀島佑作のほうを見た。亀島は、牛乳だけを飲み、給食は一切手を着けていなかった。

食欲がないなら、ぼくが代わりに全部食べてあげるのに——と思つたが、そんな場合ではないことに気づいた。

萱場先生のほうを見やると、いつものように、まずそうに給食を半分ほど食べ、

ため息をついていた。牛乳には口を付けていなかった。

「御器所君」

不意に、萱場先生に声をかけられ、ぼくはびくつと体を震わせた。目立つことがとてつもなく苦手なぼくは、先生に名前を呼ばただけで緊張してしまう。

「牛乳、飲む？」

「は、は、はい」

ぼくは萱場先生の机に歩み寄って、ちらつと不老のほうを盗み見した。幸か不幸か、不老の言葉に、金が笑い声を上げている。楽しそうな二人の会話。

牛乳瓶を受け取り、胸底で「くっそー」と言いながら、その場で一気に飲み干した。

牛乳を飲むと身長が伸びる、というが、ぼくの場合はタテではなくヨコに作用するようだ。

悲しい現実だけど、やっぱり食べることは好きだ。

牛乳瓶を収めるケースに空瓶を入れて、ふと亀島のほうを見ると、やっぱり亀島は給食を口にしようとしていなかった。ただ、腕組みをしたまま、机の上の給食をにらんでいる。

亀島の班の他の五人は、黙りこくつたまま給食を食べていた。この班の「島」の周囲だけ、異様に重苦しい空気が漂っていた。

席に戻ろうとして、ためらった。

「あの……亀島」

自分らしくないことだけど、ぼくは呼びかけていた。

亀島は、まるで怒っているような視線をぼくに向けた。思わずひるんで一歩後ずさった。

「あの……何か、あったの？」

おそろおそろ、訊ねた。

亀島佑作は、ぼくのほうを見もせず、つぶやき声で言った。

「こんな給食、食べられるか……!」

「どうして……」

亀島は、突然、振り向いた。ぼくはさらに二歩半後ずさった。

「今日もまた、こいつが入ってたんだ」

亀島は、お盆の上を指さした。

それは細長い小石のように見えた。

『「今日もまた」っていうことは、前にも入ってたの?』

ぼくが訊くと、亀島はうつむいた。そして、絞り出すような声で言った。

「今週に入ってから、毎日だよ。そんなこと、あり得ないだろう?」

「毎日……? この石が?」

何か、「事件」の気配を感じてぼくは亀島に歩み寄っていた。

「石じゃない……よく見ろよ」

ぼくは、亀島佑作の給食の盆の上に載っている物体に顔を近づけた。ちょうど、

一・五センチほどのラグビー・ボールのような形をしている。

「何これ?」

「今日で五回目だよ。五つ目の、梅干しの種だよ!」

亀島が言うや否や、視界の片隅で不老翔太郎が立ち上がったのが見えた。

「つまり『梅干しの種五つ』が、亀島君の給食に入れられていた、ということなんだね」

なぜかうれしそうな顔で、不老翔太郎は言った。

「ちよつと不老君、真面目に考えてるの?」

なぜかぼくたちと一緒に歩いてきた金銀河が、両手を腰に当てて不老を見上げた。

昼休み——ぼくたちは教室を出て、北校舎——別名「管理棟」へと続く渡り廊下
にいた。「管理棟」とはよく言ったもので、この建物には職員室をはじめ、校長室、
教頭室、来賓室、生活指導室、保健室、図書室……などがあつた。つまり、教室は
ない。昼休みにこの渡り廊下を通つて北校舎に行くのは、図書室に行く生徒か、何
かやらかして職員室や生活指導室に呼び出された生徒だけだ。

亀島は、眉根を寄せて言葉を選ぶようにして答えた。

「一番最初は、ちよつと月曜日……ほうれんそうのみそ汁のなかに入ってたんだ」

「見事な記憶力だね。そのときはサワラのフライがおかずで、デザートは、いちごヨーグルトだった」

ぼくは必死に記憶の引き出しのなかを探ってみたけれど、まったく覚えていなかった。とにかく、いつだって給食の時間がいちばんの楽しみなのだから、「覚えていない」のは、きつと「おいしかった」ということなのだろう、と結論づけた。もつとも「おいしくなかった」記憶もないんだけど。

亀島は大きいため息をついた。まるで歳を取ったおじいさんのようにも見えた。

「火曜日には——」

「火曜はパンの日だ。おかずにはポテトスープが出たね」

すかさず不老が言う。亀島はうなずいた。

「そこに入ってた。でも、何かの間違い——給食のおばさんがミスったとか——って思ってた」

「その後も同様に、ということなんだね。水曜の給食は、野菜カレーだった」

「うん……しかもそのとき、噛み砕いて、少し飲み込んだじゃったんだ」

亀島が噛みつぶしたのは梅干しの種だけじゃないみたいだ。つまり、「苦虫」っていうやつも同時に。

「それでも亀島君は黙っていたのかい？」

不老の問いかけに、亀島は口ごもった。ちらつと視線を金銀河に向ける。

ああ、亀島もやつぱり金のことか気になるのか。そのくらいの推理はぼくだつてできる。

「恥ずかしいし……やつぱり、何かのミスかも、って思ったし」

「ほほう、ずいぶんと慎重深い性格なんだね」

確かに不老と同様、ぼくも驚いた。金銀河の前だ、という理由もあるだろうけど、優等生でスポーツマンでクラスの人気者の亀島のこんな姿は、この三年間ではじめて見た。

「もつとも、ここにもつと謙虚な人間がいるけれど、御器所君の場合は『謙虚』というよりは、『小心』と表現したほうが適切なかな」

「いいから不老君、茶々を入れないで亀島君の話聞きなさいっ」

金銀河がにらむ。

「銀河さんが肩入れしているのは、御器所君なのか、それとも亀島君のほうなのか。人並みに興味があるね」

ぼくと亀島は、ほぼ同時に顔を真っ赤に染めた。金がどんな表情をしていたか——とてもじゃないけれど、見る事ができなかつた。

「不老君！」

怒つたような金銀河の声。

「本題に戻ろう。木曜、つまり昨日だ。パンの日で、クロワッサンが出た。おかずにはささみフライ。デザートに白桃のゼリー。つまり、梅干しの種を沈めておくようなスープや汁物がなかつたが……」

「それでも、種はあつたんだ。ささみフライの上に載つてた」

「なるほど……それで、亀島君はどうしたんだい？」

「さすがに……これは誰かが俺にいやがらせをしているんだ、つて確信した。だから先生に言つたよ。月曜からの出来事を」

「で、昨日の先生の反応は？」

「まるでこつちが叱られるじゃないかって感じの眼で見られたよ。そして一言、『わかりました』だけだ。給食に異物を入れられたんだぞ。警察沙汰になつてもおかしくない『事件』じゃないか！」

「確かにその通り。六年生だから体格が大きくなつてるとはいえ、この大きさの種を間違つて飲み込んでしまつたら、一大事だ。それに、梅の種には毒がある」

「ええっ！」

ぼくと亀島と金は同時に声を上げた。

「梅の種にはアミグダリンという成分が含まれている。腸液の消化酵素の作用によつて、シアン化水素——つまり猛毒の青酸ガスを発生させる」

亀島は今にも吐きそうな顔になつた。それもそのはずだ。一度は噛み砕いて飲み込んでしまつたんだから。

不老は淡々と続けた。

「このアミグダリンという成分は、以前はビタミンB—17と呼ばれて、癌の治療

に効果があると主張する研究者もいたようだ。けれど、その後の研究で、癌にはまったく効果がないことがわかった。アミグダリンを摂取することによって、むしろ青酸中毒になるリスクのほうが高いという研究もあるんだよ」

亀島の顔が、ますます青白くなった。

「しかし、安心したまえ。熟した梅の実にアミグダリンはほとんど含まれていないんだ——熟す前の青い梅の実を食べたら、おなかを壊すかもしれないけれどね。さらに、梅干しにしてしまえば、毒性の心配は皆無だよ。君たちは食べたことがないのかな、俗に『天神様』と呼ばれる種の内部——『仁』とも呼ばれる——つまり『胚乳』を。タンパク質を含んでいて、僕はとてもおいしいと思うけどね」

それでも亀島の顔色は変わらなかった。

「不老君……悪い冗談はやめてよ」

金銀河が言った。が、不老は右の眉だけを器用に上げただけだった。

「冗談なんかじゃなく、純粹に科学的データを挙げただけだよ。さて、話を本題に戻そうか。そして今日もまた、梅干しの種が『にらたまスープ』に入れられていたそうだけど……」

亀島は、まだこわばった表情だった。ぼくも、同じようにドキドキと高鳴る心臓の鼓動を感じていた。そして、不老翔太郎という「ド変人」への怒りが増した。

そんな様子に気づくはずもなく、不老は続けた。

「今まで何もなかったにも関わらず、今週に入ってから『梅干しの種五つ』混入事件が起こった。その点には、きつと理由があるに違いない」

「偶然とは思えないわね。明らかに、亀島君個人を狙ったとしか考えられない」

金銀河が言う。

「どうして、俺が……?」

亀島がつぶやいた。

「亀島君、もう一度、さっきの梅干しの種を見せてもらえるかな」

亀島は、ティッシュに包んだ種を、汚いものにでも触れるかのように、不老に差し出した。

不老はお構いなくティッシュを開くと、梅干しの種を手を取った。ためつすがめ

つすると、なんてことだろう、鼻に近づけて匂いを嗅いだ。

「いつも種はこの大きさ？」

「ああ、だいたい同じような種だったよ」

「かなり大きめの梅干しだ。実はきれいに取り除かれている……いや、しゃぶり尽くされているのかもしれないが……」

金銀河が顔をしかめた。

よくもまあ、どこの誰ともわからない他人がしゃぶった（かもしれない）梅干しの種に触れるな、とぼくもあきれた。

「梅干し特有の匂いがしない。食べられてから相当時間が経過しているのか……いや……かすかに匂うぞ」

「もうやめろよ、不老。汚いよ」

もちろん、聞く耳なんぞを持っている不老翔太郎ではない。

「無臭の匂いだ」

「はあ？」

おかしいのは不老の嗅覚なのか、アタマなのか、それとも両方なのか？

「亀島君、ほかの四つの種は、持っているかい？」

「そんなの、すぐに捨てちゃったよ。気持ち悪いじゃないか」

けれど、金銀河が短く「あつ」と声を上げた。

「そうか、この種、洗ってあるんだ」

「はあ？」

間の抜けた声を出すことしかできないぼく。

「わかんないの？ 洗剤！ うちの食洗機の洗剤も、『無臭』って書いてあるけど、

独特の匂いがするもん」

亀島が怪訝そうに言った。

「でも……俺に対する嫌がらせだったら……わざわざ洗ったりしないんじゃないか？」

「さすがは、亀島君だ。僕も同じことを考えていたよ。思った以上に、この事件は奥が深そうだな……」

「そうね、誰が、どうやって、なぜ、梅干しの種を入れたのか……」

金銀河はいつの間にか腕組みをしている。

『『フーダニット』』としても『ハウダニット』としても、さして難しくはない。問題は『ホワイダニット』という点だ。面白い、実に面白いよ。この種、しばらくお借りするよ」

不老は独り言のように、どこの国の言語かすらもわからない意味不明の単語を並べ立てながら、ポケット・ティッシュを取り出し——わざわざ常備しているとは、妙に几帳面なところのあるやつだ——それで種をくるんでズボンのポケットに収めた。

やつぱり不老翔太郎はイカれている。いったいぜんたい「ナントカダニット」って何語なんだ？

亀島みたいな優等生なら呆然としているだろう……と思ったが、あろうことか、大きくうなずいていた。

「容疑者は五人しかない。もしも俺が荒畑みただったら、全員をシメ上げて吐かせるんだろうけど、もちろんそんなことはできないじゃないか」

亀島は言った。ぼくが「なぜ五人なのか」という質問を発する前に、金銀河が言った。

「違うよ、容疑者は十一人」

「えっ？ そんなに？ じゃあ、クラスの三分の一じゃないか……」

亀島はうろたえていた。ぼくの狼狽はそれ以上だったけど。

「そのとおりだよ、銀河さん」

うれしそうに不老がうなずいている。

「ちよつとタイム。どうして五人とか十人とかになるの？ 六人とか七人とか……もしかして十三人とか、いや、クラス全員、被害者の亀島とぼくを除いて二十八人が容疑者っていう可能性だ……」

ぼくの疑問は、「あーあ」という金銀河の声に遮られた。

「じゃあ、御器所君は、わたしも容疑者にカウントしてるんだ」

「いや、まさかそんなこと……だったら……えー、二十七人……」

あせりながらとりつくろった。けれど次の瞬間には、不老が、大きく大きく聞き覚えのあるため息をついた。

「わかつてないね、御器所君は。前回の席替えはいつだった？」

「はあ？ 席替え？」

もうダメだ。ぼくの脳細胞は、ただ混乱するばかりだ。

どうせバカにされることを覚悟で、ぼくは訊いた。訊くはいつときの恥。訊かぬは一生の恥、と昔の偉い人——誰か知らないけど——は言った。どうせ金銀河の前で恥をかくなら、訊いたほうがマシだ。

「どうして『席替え』と梅干しの種に関係があるのか、ぼくにはさっぱりわからない。ちゃんと説明してくれよ」

「誰が種を入れられる？」

「えーと……あつ、そうか、同じ班の子だ！」

先週の金曜日に、席替えが行なわれた。つまり、それで班のメンバーが変わった。新しい班での給食は、ちょうど今週の月曜からスタートしたのだ——亀島への梅干しの種混入事件もまた同時に。

だから、給食の時間に、亀島は同じ班の生徒たちをにらみつけていたのだ。

しかし、金銀河はさつき——

「十一人って言ったっけ？」

「人の話をちゃんと聞かないのは、伝記作家として失格だね」

前にも同じ単語を、不老の口から聞いたことがある。誰が伝記なんか書くものか。質問する間もなく、不老は続けた。

「いいかい、四月に転校して来た僕ですらわかることだ。どうして六年目の君にわからない？」

「はあ？」

またも、間の抜けた返答。しかも、金銀河の前で。そして、当の金が大げさにため息をついて、ぼくに一步近づいてきた。反射的に一步下がってしまう——逆に一步近づけば、大接近できたのに……ということとは、あとから気づくものだ。

「わからないの？ 席替えをしたから、班が変わった。だったら、給食当番も変わ

るでしょ？」

「あ……だから、その班の生徒も容疑者ってことか……」

やっぱり間抜けな返答しか返せないのが悔しい。

「三十一人の人間のなかで、もつとも怪しい容疑者が十一人……確率的なことだけを考えれば、ひじょうに難しい事件だと言えるね」

「三十一人？ 一人多いじゃないか」

「萱場先生を含めれば、このクラスで給食を食べていたのは三十一人だ」

ぼくの脳味噌は溶けてしまいそうだ。

「ちよつと待った。先生まで容疑者の数に入れてるのか？」

愚問だった。この男は、いつだって「どうかしてる」のである。

「容疑者とは言っていない。事実を述べたまでき。正確な事実を把握しない限り、真相にたどり着くことはできない」

確かに、亀島が萱場先生に訴えたときの先生の態度は、いつもの先生じゃなかった。亀島の「梅干しの種五つ」混入事件について、萱場先生の態度は奇妙だ。

そのときだった。背後から声が飛んできた。

「何やつてるの。早く教室に戻りなさい」

噂をすれば影、というやつだろうか。当の萱場先生だった。ぼくは確実に二十五センチは飛び上がった。

ぼくたち四人は、萱場先生の声に無理矢理背中を押されるようにして、なんとなく早足になつて教室に向かった。

先頭を歩いていた不老が教室の扉に手をかけたまさにその瞬間、五時間目の始業を告げるチャイムが鳴った。

不老が、不意に動きを止めた。その隣の金銀河——悔しいけど、二人はずつと並んで歩いていた——が顔を見合わせた。

数メートル背後から、萱場先生が国語の教科書を抱えて近づいてくる。

不老は金銀河を見やり、続いてぼくに視線を向けた。ぼくの隣の亀島は、怒ったような顔で、無言ながら「早く教室に入れよ」と訴えている。

「不老、邪魔だよ」

ぼくの隣の亀島が言った。が、不老はそのままの姿勢で、背後を振り返った。なぜか怒ったような表情の萱場先生が近づいてくる。

「おい不老、今日は漢字テストの日だろう？」

亀島がいらだつた声を上げた。

確かにそうだった。ぼくは全然、勉強してなかったけど。でも、漢字テストは得意だ。八十点以下を取ったことはないの、べつに心配はしていない。

と、そのときになって、はつと気がついた。

チャイム？

ということとは、ついさつき、五時間目が始まったばかり？

萱場先生だけじゃなくて、他の先生も、五時間目のチャイムと同時に教室に入ってくるなんてことはない——これはぼくが五年間この小学校に在籍して身をもつて体験した事実だ。

チャイムと同時に教室に入るためには、チャイムが鳴る前に職員室を出なければいけない。つまり、多くの先生がチャイム前に職員室を出るほど熱心ではない、ということだ。

なのに、今日に限ってどうしてチャイムが鳴る前に萱場先生が渡り廊下まで来ていたのだろうか？ そして、チャイムが鳴って十五秒後には教室に着いている——こんなこと、今までにはなかった。

「さ、早く席に着きなさい！」

鋭い萱場先生の声が響いた。

廊下で駄弁っていた生徒——いつも女子が多いのはどういうことだろう——が、しぶしぶと教室に入った。

ぼくたちも各自の席に着いた。

ふと不老のほうを見やると、不老は腕組みをして、眼をつぶっていた。もちろん、こいつが居眠りをするはずがなく、何か深く考え事をしているに違いなかった。

「じゃあ、教科書の二十一ページ——」

萱場先生は、亀島の給食への「梅干しの種五つ」混入事件について、何か知っているのだろうか？ まさか、先生が犯人とは思えない。かりに真犯人だとするなら

ば、動機がないし、それに梅干しの種を入れる機会もない……。

「はい、御器所君、読んで」

唐突に、名前を呼ばれた。

「あ、あの……」

「二十一ページ！」

不機嫌そうに萱場先生は言った。

こんなとき、ぼくはすっかり緊張してしまふ。まるで金銀河にじつと見つめられたときのように——そんな経験、ほとんどないけど——顔は真っ赤になってしまい、全身から汗が出る。緊張を苦い唾と一緒に喉の奥に飲み込んでから、立ち上がった。が、そのときだった。ぼくは、ゆつくりと背後を振り返った。

やはり、不老翔太郎は腕組みをしたままだった。その隣の金銀河は、小首をかしげて不思議そうな表情をぼくに向けた。

もつと汗が出た。

でも、おそらく金銀河と考えていることは同じだったはずだ。

漢字テストは、どうして行われないのか？

いったい、萱場先生は何を考えてるのだろうか？

六時間目の「社会」の授業が終わり、掃除も終わって「帰りの会」が始まった。萱場先生はぼくらのほうを見もせず、来週の連絡事項——「算数『計算ドリル』の宿題を忘れないように」という、大したことのない話——を告げた。

そして、ちらつと腕時計に眼をやると、言った。

「じゃあ、日直、号令」

が、その瞬間に、「先生！」と手を挙げた生徒がいた。

こんなタイミングで、みんなが完全に帰る態勢になつていなのに、ランドセルに手をかけた状況なのに——まったく周囲の様子を読まないような人間は、この地球上に一人しかいない。

不老翔太郎だ。ぼくは大きな大きなため息をついた。

「先生、この教室で給食に異物混入事件が起こっていることは知ってますよね？」

おいおい、先生に向かつてなんだ、その物言いは。それ以前に、クラス全員の前で言うことか？ 文字通り、頭を抱えた。

こんな変人と友だちだと思われるなんて、心外だ。最悪だ。

「聞いてます。そのことは、ちゃんと給食室の担当の人に報告しておいたので、心配する必要はないわよ、不老君」

「そうでしょうか。今週、この教室で起こった事件——あえてそう呼ばせてもらいます——は、給食室で偶発的に発生した事故とは考えられません」

萱場先生は、ぼくと同じように大きなため息をついた。誰だつて、常識を持っている人間なら、不老の物言いのため息をつかすにはいられないはずだ。

けれど、不老翔太郎の辞書に「常識」の文字はなかった。

萱場先生は腕時計を見やると、突き放すような口調で言った。

「不老君が心配してくれているのは先生としてもうれしいけど、二度と、こういうことは起こりません。だから、来週からは安心して給食を食べて下さい」

先生の台詞の後半は、クラス全員へ向けたものになっていた。

不老は黙りこくったまま、腕組みをしていた。

「起立！」

という、日直の号令がかかっても、不老は腕組みのまま立ち上がった。

「さようなら」

日直のお決まりの台詞に続いて、ぼくらも「さようなら」と義務的に唱和する。

そのあいだも、ずっと不老は腕組みをしたままだった。妙な姿だったけれど、ぼくは笑う気になれなかった。

ぼく、亀島、不老翔太郎、そしてやつぱりなぜか金銀河も一緒に、管理棟の裏側にある職員用駐車場にいた。ここにはほとんど他の生徒は来ない。なんとなく、ぼくたちは誰にも聞かれてはいけない密談を始めるような気分だった。

「さて、本題だ。もう一度、詳細を初めから検討する必要があるね、亀島君」

不老は、珍しくあつげらかんとした表情だった。

「でも、全部話したじゃないか」

「もう一度、月曜日の最初の『梅干しの種』混入の経緯から、話してくれないか？君が忘れていていること、我々が気づかないことが、新たに見つかるかもしれない」

「わかったよ……」

亀島は素直に月曜の給食の時間に梅干しの種を見つけた様子を話し始めた。どうやら、亀島も不老の持つ奇妙な空気に引き寄せられてしまったようだ。

金銀河も、身を乗り出して亀島の話の話を聞いている。

ぼくは、みんなに聞こえないようにため息をついた。

どうして不老のようなやつに引き寄せられなきゃいけない？ ぼくはただ、これ以上へんなことを言い出さないでくれ、と冷や冷やのしどおしだ。当然、不老がぼくの気苦労を知っているはずはないし、知ろうとするはずもない。なんておかしな人間と関わってしまったんだろう、と全身の筋肉と脳細胞が疲れを訴え始めた。

「あ、先生！」

鋭く金銀河が言った。

瞬間的に、なんとなく隠れなきゃ、と思った。いや、べつにぼくたちは悪いことなんか何もしていないんだけど。

その気持ちは亀島と金銀河も同じようだった。

ぼくたち三人は、素早くシルヴァーのプリウス——確か教頭先生の車だ——の背後に身を隠した。

「何をしているんだい？」

不老が悠々と歩いてくる。

萱場先生の姿が見えた。かなり疲れている様子だった。いつも授業中に着ている紺色のジャージではなく、パンツ・スーツ姿だった。

萱場先生は駐車場のいちばん端の日陰になっているところへ向かい、フルフェイス・ヘルメットをかぶると、中型のバイクにまたがった。

「ほほう、萱場先生はバイク通勤だったのか」

不老は突っ立ったまま、驚いた表情を見せた。

萱場先生は、ぼくたちに気づいた様子もなく、バイクのエンジンをかけた。そして、急発進させた。重低音が腹の底のほうを振動させた。

と同時に、その振動に誘発されたのか、ぼくの胃袋が「ぐおるる」と間拔けな音を発した。

給食だけでは、絶対に足りないに決まっているじゃないか。給食の時間、不老に奪い取られたフルーツミックスゼリーの姿がちらつく。晩ご飯までは、まだ二時間はたっぷりあるのに。

よりいっそう全身がぐったりと弛緩してしまった。

萱場先生のバイクは裏門から外に姿を消した。

ぼくたちは教頭先生のプリウスの陰から出た。

「先生という立場にしては、ご帰宅が少し早いんじゃないかな」

不意に不老が言った。

「何か大事な用事があるんじゃないの？ 例えば、デートとか。今日は金曜だしね」
金銀河が言った。

三十七歳・独身の萱場先生に彼氏ができたというなら、それはめでたいことだ。もう職員室で他の先生たちに笑われることもなくなるだろう。

「なるほど。確かに今日は『花金』だ。ずいぶんと立派なスーツを着ていたよ」

「ハナキン？」

「今どきの若い人は知らないだろうけどね、昔は『花の金曜日』と言われていたものだよ」

おまえだつて「今どきの若い者」というか「今どきの小学生」だろうが、という言葉危うく飲み込んだ。その代わり、ぼくは不老をにらみつけた。

「引つかかるな。萱場先生のあの顔は、『花金』を楽しむ表情ではなかった……」

「へえ、それはそれは、不老は人生経験さぞや豊富なことなんでしょうね」

混ぜっ返したが、無視された。いい加減にこの男のこういう態度に慣れないといけないんだろうけど、やっぱり腹立たしい。

「萱場先生は、何をしようとしているのか？ 何を思っているのか……」

独り言のように不老は言った。

「昼休みにも言つてたけど、まさか萱場先生が容疑者だつていうのか？」

はつと我に返つたように、不老はぼくを見て、短く息を吐いた。

「容疑者は、六人」

「ええつ、どうして一気に減るの？」

金銀河が一步、不老に歩み寄る。うわ、近い。それ以上、この男に近づくな——なんてぼくには言えなかった。

「梅干しの種は、すべて給食の内部に入っていた。昨日に限っては、さきみフライの上だったけれど、それは犯人にとって、やむを得なかったんだ。汁物がなかったのだからね」

ぼくは突つかかった。

「『なんで六人になるのか』って質問の答えになってないよ」

「まだわからないかな、御器所君。昨日まで、梅干しの種は汁物のなかに沈んでいた。だから亀島君が野菜カレーと一緒に食べてしまったわけだ」

そこで、わざとらしく不老は言葉を切った。

残念ながら、まだ、ぼくにはわからなかった。不老はぴくり、と眉を動かした。

「種は『先に』食器に入れられていた」

亀島が、ゆつくりと口を開けた。亀島のこんな間の抜けた表情を目撃するのは初の体験だ。そのあんぐりと開けた口から、かすれた声が漏れた。

「犯人は、給食当番か！」

「今週の給食当番は……一班ね」

金銀河の表情が、少し青ざめたように見えた。

「でも、一班の誰が……」

ぼくが口を挟もうとすると、やっぱり不老翔太郎に遮られた。

「今回の『梅干しの種五つ』混入事件は、無差別なターゲットに向けて行なわれたとは考えられない。もつとも、可能性としてはゼロじゃないけれどね。犯人たちが三十人分の給食のたった一つに種を入れ、それが五日間連続で亀島君のもとへ運ばれる確率は、単純に計算して三十分の一の五乗。つまり……えーと」

頭がくらくらしてきた。

「二千四百三十分の一！ 不老君、そんなことはどうでもいいから……」

頭のくらくら度がさらに上昇した。ぼくは「ゴジョー」の意味もわからないとい

うのに。

「あ、ちよつと待って！ 今、不老君、さつき何て言ったの？」

ぼくが眩暈と闘っているあいだにも、金銀河の頭脳は何倍も速く回転しているよ
うだ。

「不老、今、『犯人たち』と言ったか？ 複数犯なのか？」

亀島もまた鋭い声を発した。今にも不老に掴みかからんばかりだった。ぼくは、
まだくらぐらの波と格闘中だった。

不老は大げさに天を仰いだ。こんな芝居がかつた仕草のできる小学六年がいつた
い他にいるだろうか？

「この学校での給食当番の仕事は、転校生の僕よりも君たちのほうがずっと詳しい
んじゃないか。彼らが給食の準備に何をしているか考えてみればわかることさ。」

ぼくの脳内には「？」が百八個くらいふわふわ浮かんでいるというのに、金銀河
が不老に続けて言った。

「まず食器に給食を盛りつける係、そしてそれを運ぶ係——その両方の協力がなけ
れば、亀島君を狙って種の入った給食を配膳することは不可能。盛りつけ係と運び
係の両方に一人ずつ、共犯関係にある子がいた……そういうことでしょ？」

金銀河は得意げだった。

不老は片方の眉毛をびくりと上げた。

「一人ずつかどうかは、わからない。それ以上の共犯がいる可能性は否定できない。

例えば——」

不老翔太郎は、あるイギリスの探偵小説の真犯人を例に挙げた。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよ、ちよつと待ったあ！」

ぼくは叫ぶように言った。なぜなら、ちよつとそれは、ぼくが今まさに読みかけ
の本だったからだ。

しかし、不老翔太郎に「人の気持ちを察する」能力などありはしない。

まるで世間話のように、何の躊躇もなく、不老は「真犯人」の正体をしゃべった。
ぼくに耳をふさぐ暇はなかった。ぼくは聞いてしまった。

「マジで……？ それ、反則だよ……」

泣きそうになった。もうすぐエルキュール・ポワロが灰色の脳細胞を駆使して、事件を解決する寸前だったというのに。

「いや、まったく反則じゃない。クリステイ女史は、いつだって実にフェアに小説を書いている」

ぼくの体から力が抜ける。反則なのはアガサ・クリステイじゃなくて、不老だ。そんなぼくの気持ちを一ミリたりとも意に介さないのが不老翔太郎だ。不老は、探偵小説のネタバレをしたことなど忘却したかのように、その鋭利な視線を亀島に向けた。

「さて、亀島君。君はほんとうに心当たりがない、と言うんだね」

「ああもちろんだよ。俺は何もやってない……いや、俺の班の誰かが犯人だとずつと疑ってたのは、確かに悪かったよ。みんなに謝らなきゃいけないな」

「亀島君、それは気にしないで。悪いのは犯人なんだから。亀島君って、ホントに優しい人なんだね」

金銀河が、いたわるような声をかけた。

亀島の視線が泳ぎ、その顔の血管の血流量が増えたことを、ぼくは見逃さなかった。それをごまかすかのように、亀島は空を見上げてつぶやいた。

「一班か……俊介は絶対に犯人じゃないな。あいつが俺に恨みなんかを持つてるはずがない」

亀島に「俊介」と呼ばれたのは、もちろん桜山俊介——金銀河に「暗号」を送ったやつ——だ。桜山は、どういうわけか、転校してきてからすぐに亀島と仲が良かった。みんなの前でふざけたことをやって「笑いを取る」ことを生き甲斐にしていくような桜山——確かに、陰湿な「梅干しの種」混入事件なんて起こすとは思えない。

「それに、アントニオも犯人じゃない」

「ほほう、どうしてそう思うんだい？」

不老翔太郎が、じつと亀島の顔を見ながら言った。

「あいつとは幼稚園の頃からずっと同じクラスで……つまり、恥ずかしいけどさ、『親友』っていうのかな。そんなやつなんだよ」

それは初耳だった。べつに恥ずかしがることじゃないとは思うけれど。

アントニオとは、植田^{うえた}アントニオのことだ。お父さんが日系ブラジル人二世だから三世で、お母さんは生粋のブラジル人。ほんとうはもつと長い長い名前らしい。けれど、ぼくは「植田アントニオ」という名前しか知らない。

さすがブラジル系といっているのだろうか、サッカーがめつたやたらと上手い。去年の秋の「球技大会」で、左サイドからの亀島のセンターリングにあわせてヘディング・シュートを決めた植田の姿に、みんなが歓声を上げた。

どっちにせよ、亀島ほどじゃないけれど、女子に人気があるのは間違いない。すらりと痩せて背が高く、色黒で真っ白な歯を見せて笑顔になると、女子は「キャーキャー」騒ぐとか騒がないとか……その場を見たことがないから何とも言えないけど。

ふと気づいて、ぼくは口を挟んだ。

「荒畑はどうなの？ 荒畑だったら、こんなおかしなこと、間違いなくやらないよ」
クラスでナンバー・ワンの問題児、荒畑力哉。いや、この男には「児」という文字が絶対的にふさわしくない。身長は四捨五入すれば一八〇センチ近い。そして、横幅も広い。一見して、絶対に小学六年生には見えない——不老翔太郎とはべつの意味で、だけど。

もしも荒畑が亀島に何か遺恨を持っているなら、もつと直接的な方法でそれを表すはずだ。

たとえば、拳。あるいは蹴り。

あるいは肘だつて、膝だつて、荒畑はいろんな身体の使い方を知っているはずだ。が、それで済めばまだマシなほうかもしれない。

「では、男子が犯人である可能性は低いということか」

不老が言うと、金銀河が口を尖らせた。

「ちよつと、わたしにも言わせてよ。ミオは絶対に犯人じゃない。ミオとは一年生からずっと同じクラスなんだよ。すつごく仲いいし、ミオが亀島君の給食にヘンなことをするなんて、あり得ない。わたしが一二〇パーセント保証する！」

金銀河の言う「ミオ」とは、小幡^{おばたみお}美桜のことだった。

正直に白状すると、結構、可愛いとぼくは思う。成績も金銀河と同様に優秀。五年生で同じクラスになってから、何度か金銀河と親しく話している姿を見たことがある。背はそれほど高くなくて、ぼくと同じくらいだ。あんまり話したことはないけれど、妙に「社会」好きというか「歴史」好きな子だ。ふわつとしたおかつぽ頭だが、それがよく似合っていて、小幡美桜のことが好きだという男子も、一人や二人じゃないはずだ。

が、金銀河と仲がよくても、亀島に対してどんな気持ちを持っているかは、別問題だ。金にしては非論理的なことを言うな、と思ったが、続いて金銀河は言った。

「それにアサミちゃんも」

くろかわあさみ

黒川亜佐美のことだ。ごくごく目立たない、「十五人の女子の一人」だ。いつも地味な服装をしている。名字を意識しているのかどうか、いつも黒っぽい服を身にまとっていることが多い。眼鏡をかけているけれど、同じように眼鏡をかけた本郷梓とは、全然雰囲気が違う。本郷は可愛らしいけれど、見た目だけで判断すれば、黒川はかなり怪しい。

「じゃあ、白鳥は？」
しらとり

ぼくは口を挟んだ。亀島は、あっけに取られた顔になった。

白鳥あやめ。ぼくは三年生から同じクラスになった。名前だけを聞けば、どこかの深窓の令嬢といった風情だけど、見た目は六年生女子のなかでもっとも体重も重い——と言われている。真偽のほどは定かじやないけど。けれど、本人は、ぼくよりも明らかに太っているのに、それを何とも思っていない様子で、大声で「ゲヒヤハハハ！」（ほんとうにそう聞こえるのだ）と笑い、やたらと明るい。ぼくと比べるのはちよつと、いや、大いに不本意ではあるけれど、白鳥のあの陽気さはどこから来るんだろう、とうらやましく思うことがあるのは事実だ。

だからこそ、陽性の白鳥あやめが、暗くじめじめしたこの事件に関わっていると、は到底考えられなかった。

「待ちたまえ」

うわ、また出た。この男の「たまえ」だ。何かの冗談みたいに見えるだろうが、不老が言うと、妙に説得力があり、一瞬だけ自然に聞こえてしまうのが不思議だ。

実際、金銀河をはじめ、みんなは黙り込んだ。

「いいかい、私情を挟んでいては、冷静客観的な推理はできない。この際、友だちだとか親しいとかいった感情は抜きにして検討しなければいけない。案外、犯人は身近なところにいるかもしれない」

「そうだな。アントニオがサッカー部でまだ練習してるはずだぞ」

「ほほう、それは実にいいタイミングだ」

我知らず、大きなため息が出る。眼の前にはいるのは、六年の最強モテ男子とモテ女子だ。そんな二人を軽くあしらうことのできる不老を、ぼくはとてつもなくうらやましく感じたのは事実だ。ぼくには逆立ちしたって真似できない——そもそも逆立ちができないけど。

「じゃあ、ぼくは帰るよ。何かわかったら、後で知らせてよ」

ぼくはランドセルを背負った。

「何をしているんだい、御器所君」

不老の声が背中から追いかけてくる。

「だって、これから一班のみんなを一人ずつ調べに行くんだろう？ だったらぼく

なんかは邪魔だから——」

「親愛なる伝記作家たる君がいないと、僕が困る」

またか……とうつぶわいた。「シンアイナルデンキサッカー」という文句——つまり、

何の活躍もしないけど、とりあえず脇役としてそこにいるだけでいい、という役回りのことなんだろう。けれど、絶対に不老翔太郎なんかの伝記を書くものか。

「僕が、困るんだ。御器所君、一緒に来てくれ」

なんと身勝手な言い分だろうか？ べつにぼくは全然困らないんだけど。

けれど、不思議に不愉快にはならなかった。

ちょうどサッカー部の練習が終わったところらしく、傾いた陽光の下で、植田アントニオは水飲み場で上半身裸になって、頭から水道の水をかぶっていた。

よく日焼けした体、筋肉も発達している。きつと腹筋だって割れているんだろう。

「やだあー！」

珍しく女の子っぽい声を金銀河が上げて顔を背けた。

どうして男の上半身にそんなに恥ずかしがる必要がある？ 女子ってホントに不可思議な生き物だ。

亀島が歩み寄ると、植田アントニオはにつこり笑って歩み寄ってきた。

ははあ、確かに女子にもてるはずだ。いつも地味で、ちよつとくたびれた服装で学校に来るけれど、背は高いし色黒の肌からのぞく真つ白な歯——どこかのアイドルみたいだ。いや、ほんとうに、オーディションを受けたら合格するんじゃないか。

亀島と不老が歩み寄り、植田はしばらく話していた。が、徐々に植田の眉間に皺が寄っていくのが見えた。

そして植田は大きき首を左右に振り、両の手のひらを上に向け、空に向かって何ごとかを言った。それは「ホデール」というようにも聞こえた。少なくとも日本語ではなかった。植田は脱ぎ捨てた体操服を拾い上げると、乱暴に砂を払い、サッカー部の部室のほうへ去って行った。

「どうだった？ 植田は、やっぱり怪しかった？」

ぼくが訊くと、不老は片方の眉を器用に吊り上げた。

「何とも言えないね。亀島君はどう思う？」

不老の問いに、亀島は表情を曇らせた。

「あいつは何もしてないよ。俺、あいつを、傷つけちまったかな……」

「そう、亀島君、君は植田君を傷つけたんだ。間違いなく、ね」

不老の情け容赦のない言葉に、さすがのぼくも腹が立った。

「もともと不老が口を挟むから、そういうことになるんじゃないか」

「確かに、そう言えなくもないかな」

珍しく不老は、少し沈んだ声になった。

「不老にも、金さんにも、ホントに俺のことで迷惑かけちまったと思う。もしよかつたら、うちに来ないか？ そこでじっくり腰据えて、話し合いたいんだ。もし迷惑じゃなかったら、だけど」

確かに亀島はよくできた人間だ、と思う。本気でこんなことを言えるやつなんて、そうめつたにはいない。ルックスだけじゃなく、性格もまた限りなくパーフェクト

に近い。女子にモテるハズだ。

もつとも、その地位を眼の前の不老翔太郎——人格は破綻して、まったく周囲の空気を読む能力に欠け、そのいつぼうで、他人を不愉快にさせる空気ををばらまく能力に長け、何ら我関せずという、大人になったらほぼ間違いなく「社会不適応者」——という「超変人」が奪取しつつあることに気づいているのだろうか。亀島も、不老自身も。

女子にモテなくて、頭の回転も悪くて、背が低くて、太つてて、さらに底意地も悪いぼくは、そんなことを考えていた。

「全然迷惑じゃないよ。ねえ不老君、一緒に来て事件を解決しよう！」

金銀河が勢い込むように言う。

亀島は言った。しかし、やはり不老は浮かない表情だった。

「しかし、萱場先生が……」

「はあ？ 不老、真面目に今度の事件のこと、考えてるのか？」

思いもかけない言葉に、ぼくは裏返った声を出した。が、不老の耳にはわずか二メートルの至近距離からのぼくの声も届いていない様子だった。

「誰も萱場先生を心配していない。それが僕には心配だ」

「萱場先生がどうかしたの？ 亀島君の事件に、先生が関わってるっていうの？」

金銀河が不老の顔をのぞきこむ。「近すぎる！」と胸の内ではぼくは叫んだ。

「そう。ある意味で、関わっている。萱場先生の言葉を覚えてるかい？」

不老はそう言うのと、またしても腕組みをし、左手の人差し指を唇にあてた。まるで「しーっ」とぼくらに沈黙を強いるかのように。

そんな姿勢のまま、不老翔太郎は言った。

「萱場先生は言った。『もう二度とこんな事件は起こらない。来週からは安心して給食を食べていい』……」

「確かに言ってたね。それで？」

ぼくは、ため息八十五パーセントの声で答えた。

けれど金銀河が、眼を見開いた。夕陽が金銀河の両の瞳に反射して、「カワイいな」と思ったのは内緒にしておこう。

「そうか！ 萱場先生も、わたしたちと同じように真相に気づいている、ってことね？ 犯人は給食当番の一班にいる、って」

「はあ？」

反射的に間抜けな声を上げ、同時に腹の虫も間の抜けた声で「ぐおうるる」と鳴いた。

亀島が不満そうに、そして不快そうに、唇のはしをねじ曲げた。二枚目が台無しだ。もつとも、台無しにしたのはぼくの腹の虫なんだけだ。

「萱場先生が真相に気づいてるなら、どうして俺の話をちゃんと聴いてくれなかったんだ？」

「そうね。でも、どうして隠さないといけないのかな……？」

金銀河も視線を宙に向けて、考え込んでいるようだった。

ぼくも脳味噌をフル回転させて考えてはみたけれど、何も浮かんでこなかった。

クラスの、いや全六年生のなかの優等生である金銀河と亀島佑作という二人が考えてもわからないのだ。

そんなことを、このぼくが考えたってカロリーを無為に消耗するだけだ。

と思ったためなのか、またしてもぼくの腹は正直にも「ぐおうるる」と、空腹の悲鳴を上げた。

金銀河がぼくをにらんだ。「きつ」とほんとうに音が聞こえそうな鋭い視線。

なんてこった。至近距離に金銀河がいるというのに。ぼくの消化器は、いらだたしいほど健康的だ。

不意に腕組みを解いて、不老は顔を上げた。

「わかった。亀島君の言うとおり、作戦会議を開こうか」

「ああ、いいよ。すぐ近くなんだ」

亀島は言った。

「わ、亀島君のおうちに行くのって、はじめて」

うれしそうに金銀河が言った。瞬間的に、亀島の顔が紅潮するのをぼくは見逃さなかった。

ぼくだって、金銀河を我が家に招きたいと思わないことはないけれど……それは

決して無理な相談だ。

「あの、ぼくは……」

言いかけると、不意に不老が振り返った。

「もちろん、一緒に来てくれたまえ」

『たまえ』か……ぼくが『デンキサツカ』だから？』

「そのとおり」

まだ不老につきあわなければならぬのか。ぼくは大きな大きなため息をついた。と同時に、またしてもぼくの腹が悲鳴を上げた。

ぐおうるる……

勘弁してくれよ——という言葉がチクチクとぼくの心臓の、たぶん左心室あたりを責め立てていた。

学校の正門を出て、南のほうへ五分ほど歩けば、そこにはレンガ造りの堂々たる四階建ての西洋館風の建物が二十メートル手前からでも見える。

けれど、そこが歯医者さんなのか、近づいてもよくわからない。亀島という表札の下に、銅板でできた「Kamejima Beauty Dental Clinic」という看板が、控え目に埋め込まれていた。

玄関も、一見すると歯科医院には見えない。むしろ、隠れ家的な高級フレンチ・レストラン——行ったことないけど——のような雰囲気だ。

亀島は先頭に立って、その入り口ではなく、敷地の左手に回った。そこにはもう一つ、金属製のドアがあった。

亀島はその脇のカメラ付きインタフォンのボタンを押した。すぐに女性の声が答えた。

「お帰りなさい」

その口調からすると、亀島のお母さんだろう。インタフォンのカメラでちゃんと見ているようだ。

「あの、友だちを連れてきたんだけど、いいかな？」

亀島は、やや緊張した口調だった。

「いいわよ。どなた？」

そのとき、ガチャツという音が聞こえた。一見するとふつうのドアだが、自動でロック解除ができるような仕組みになっているらしい。我が家と同じだ。もつとも、チタン合金製防弾仕様ではないだろうけど。

「えーと……三人いるんだけど、去年から同じクラスの金さんと、御器所君と、それから転校生の不老君っていうんだけど……ちよつと待って」

最後の言葉は、インタフォンの向こうのお母さんと同時に、ぼくたちにも向けられていた。亀島はドアを引き開け、家のなかに消えた。その横顔はどこか硬かった。

ぼくたちは、十分近くも待たされた。

「どうしたのかな、亀島君は？」

不老が独りごちる。

けれど、ぼくにはわかっていない。

やっとドアが開いたときには、亀島は疲れたような面持ちだった。

「ごめん。ちよつと、うちの都合で、作戦会議はできなくなった」

「さっきお母さんが『いい』っておっしゃってたじゃない？」

金銀河の言葉に、亀島は無言でうつむいた。こんな亀島の表情はじめてだ。

ぼくは、できるだけ感情を込めずに言った。

「わかってる。ぼくがNGなんだよね。ヤクザの息子に、家の敷居をまたがせるわけにいかない。常識的には、誰だつてそう思うよ。ぼくは帰るから、作戦会議の結果は、あとで知らせてよ」

そして背中を向けて、歩き出した。

「待ちたまえ、御器所君！」

命令口調の不老の声が、背中にぶつかってきた。またも「たまえ」かよ。勘弁して欲しい。

「君が帰るといふなら、僕も失礼するよ。僕には伝記作家が必要だからね」

亀島が、うなだれた。

「俺の両親つて……何というか、古い考え方の人間なんだ。だから……くそつ、これ以上言わせるなよっ！」

亀島は怒鳴り、ドアを拳で殴った。亀島の激した姿なんて、今まで一度たりとも見たことがなかった。

そのとき、静かに口を開いたのが、金銀河だった。

「わかるよ、亀島君。わたしも、同じくNGだったんでしよう?」

亀島は黙ったままだった。その沈黙こそが、雄弁な答えだった。

「へ? どうして金が?」

ぼくが言うと、金銀河は、ぼくのこれまでの十一年少々の人生で決して見せたことのない、優しい笑顔をぼくに向けた。

「御器所君が『わからない』って言うの、半分腹立つ。けど半分は、うれしいな」「へ?」

同じ間拔けな声を漏らし、ごくり、と唾を飲み込んだ。否応なく、顔面の毛細血管に血液が集まってしまふ。

「建設的な話をしよう。さて、それでは我々は、次にどこに行くべきか? ここからもつとも近い、一班の生徒は誰かな?」

不老は、まったく表情を変えなかった。

もつとも早く立ち直ったのは、やつぱり金銀河だった。いつだって、強いのは女子だ。

「ここからいちばん近いのは、亜佐美ちゃんの家かな?」

「黒川亜佐美さんだね。それでは、亜佐美さんの家に行こう」

方角もわからないくせに、不老翔太郎は歩き出した。

ぼくも、金銀河も亀島も、慌てて不老の後を追って小走りに追いかけた。

「違う! そつちじゃなくて、右に曲がるのっ!」

鋭い金銀河の声が響いた。

この街で生まれ育って十一年になるというのに、ぼくは学校の北側の地域に行つたことはほとんどなかった。

学区の北側は穏やかな丘陵地になっている。JRの駅がある南側から遠目で眺めると、ふわつとした緑のなかに、おもちゃの家が並んでいるように見える。ちょう

どぼくが生まれた頃——父さんをはじめとして、大人たちが言うには「バブルが弾けた後、ほつと一息ついた頃」なんだそう——に建てられた家々らしい。

ゆるやかとは言えない坂道を、ぼくは文字通りに「はへはへ……」とあえぎながら上った。他の三人は、軽々とスキップするかのようだった。

もつとも、ぼく以外の三人とも、成績優秀なだけじゃなくて運動神経も抜群——いや、不老はちよつと違うかもしれない——だ。

そもそも、ぼくがこの三人と行動をともにしていること自体が、どこか間違っているのだ。

ということを思いながら、「ちよつとタイム」と切れ切れの声で言おうとしたまさにそのとき、

「着いたよ」

金銀河が振り向いた。その黒い髪がふわつと弧を描く。傾きかけた陽光が髪を背後から照らす。うわ、まるで映画のワン・シーンみたいな映像だ。スローモーションでもう一度見たい。

しかし、二人の男子は、あんな奇跡的にうつくしい瞬間に気づいていないのか？ 不老も亀島も無反応だった。この二人の男子、いったいどこに眼を付けているんだ？

審美眼では、ぼくのほうがずっと優れている、と自信を持って言える。今のところ、それが役立つことがないのが悔しい。

「ピアノの先生が来るから、三十分くらいしかダメなんだって」

「三十分も必要ない。では、お邪魔させてもらおうか」

不老は臆することもなく、平然とした口調だった。

無性に腹が立ってきた。が、何も言えずに、黒川亜佐美の家を見上げた。

ほんとうに女の子の「ドール・ハウス」みたいな三階建ての家だった。ピンク色のレンガを横した外壁。窓枠は淡い黄色で塗られている。屋根は濃いグリーン。

低い扉から、色とりどりの花が植えられた庭が見える。

地味で、黒っぽい服を好んで着る黒川亜佐美のイメージとはずいぶんと違うな、と思った。

黒川亜佐美の部屋は、「ドール・ハウス」の三階にあつた。家の外観とは裏腹に、やっぱり地味だった。白と黒のモノトーン。いつもの黒川が着ている服と似ていた。やっぱり、女子の部屋に入ると、どうしても心臓がドキドキする。

一瞬、本郷梓の姿と、本郷の部屋の様子を思い出してしまった。慌てて頭を振って、雑念を脳味噌の皺の隙間から振り払う。

ぼくは、人の家に行くといつも本棚を見てしまう。自分が本好きだからだろう。逆に、自分の本棚を見られることが、とても恥ずかしい。もつとも、今のところ、ぼくの本棚を目撃した人間は不老翔太郎しかない。

黒川の部屋に本棚はなかった。あることはあつたが、入っているのは教科書と参考書、問題集。それからピアノの楽譜や教本といったもの。そして数十枚のCDだった。CDはほとんど全部、クラシックらしい、ということがわかった。とてもよく整頓されていた。ぼくの本棚とは大違いだ——いろいろな意味で。

ぼくたちは、黒川亜佐美の部屋で、カーペットの上に車座になっていた。なぜかぼくと亀島は正座をしていたけれど、不老翔太郎はというと、片膝を立てて、実にくつろいだ様子だった。

「突然来ちゃって、ごめんね」

金銀河が言うと、黒川は小さい声で、

「いいよ、金さんが言うんだから」

黒川は自宅にいるというのに、緊張した様子だった。金銀河のほうへ、助けを求めるといふ視線を送り、ぼくたちのほうに意識的に視線を向けられないようにしているのがわかった。

確かに、男子三人までが女子の家におしかけてくるのは、少々常識からはずれていると思う。

「で、訊きたいことってどんなこと?」

黒川は金に訊ねた。

「もちろん、金銀河が口を開く前に割り込むやつがいた。

「さっそくだけど、今日の給食の時間に起こった出来事を知っているね」

どうして転校生のくせに、こんなに馴れ馴れしく話せる？ しかも、女子に。

「あ……帰りの会で先生が話してたこと？」

黒川亜佐美は、伏し目がちに一瞬だけ亀島を見たが、すぐに視線を金銀河に戻した。

亀島は勢い込むように、前傾姿勢になった。

「俺の給食に、今週ずーっと、毎日毎日、梅干しの種が入られてたんだ。一班つて、今週の給食当番だったじゃん？ だから……つまりさ、何か知らないかなあ、つて思つて……」

黒川の顔色が曇った。金銀河に向かつて、すがるような視線を向けている。が、不老がそのあいだにまたもや割り込むように言った。

「亜佐美さん、君は何か、怪しい行為を目撃していないのかな？」

遠慮も会釈もありはしない。なんとも直接的、そして直截的な質問。しかも、下の名前で馴れ馴れしく呼びかける。さらに、二人称の代名詞が「君」つて……ほんとうに、不老翔太郎という人間は理解しがたい。

この不老翔太郎を止められる人間はいないのか？ いや、それは愚問だ。

「べつに亜佐美さんを疑っているんじゃない。僕らはただ、手がかりを得るために、亜佐美さんのお宅にまでお邪魔したんだ。どんな些細なことでもいい。気づいたことではないかな？ いや、質問を変えよう。今週の給食当番は、『盛りつけ係』と『配膳係』の分担はどうなっていたのかな？」

「一班は……男子が盛りつけて、女子が配つてたけど」

「月曜からずつと？」

「うん」

やつぱり黒川亜佐美は、金銀河に答えを求めるように、視線を上げた。

金銀河は言った。

「ごめんね、黒川さん。実はね、亀島君の給食に梅干しの種を入れたのは、給食当番だ、つて考えてるの。だから、もしかして黒川さんが今週一週間、何か変わった光景を見てないかな、と思つて、訊きにきたの」

「変わった光景……あ、そういえば……」

と、黒川は口ごもった。ぼくは、身を乗り出した。亀島も同様だった。しかし、ぼくよりも亀島佑作のほうがはるかに冷静だった。

「黒川、何か見たのか？」

黒川亜佐美は亀島の顔を見上げると、すぐに眼を伏せた。そして金銀河に顔を向けた。

「木曜日……だったかな……？ ……萱場先生が立ったまま、じいっと、わたしたち一班のみんなを見てた」

「萱場先生が？ 何か言ったの？」

思わずぼくが声を発していた。ここでいちばん場違いな人間なのに。

黒川は、金銀河のほうへ顔を向けて答えた。

「その日はじつとわたしたちのほうを見て……で、わたしに近づいてきたの」

「何て言ったの、先生は？」

金銀河の問いに、黒川は申し訳なきそうにかぶりを振った。

「校内放送があったの。『萱場先生、職員室へお戻り下さい』って」

そうだ、確かにそんなことがあった。

「そのために、萱場先生は、言うべきタイミングを逸したのか……」

不老が眉間に皺を寄せた。

「じゃ、一班の子が、何か不審なことをやったところ、見た？」

金銀河が問いかけると、黒川亜佐美は口ごもった。

「ううん……とくに何も……」

「あつ、そうか。やつぱりさ、言いにくいよな。わかるよ、俺、黒川の気持ち」

不意に亀島が言った。その言葉に、はじめて黒川亜佐美は顔を上げた。

「ごめん、黒川。給食で……例えばさ……俺が食中毒になった、とかいうわけじゃないだろ？ もういいよ」

なぜか亀島は、恥ずかしそうに言った。金銀河は二人を交互に見たあと、大きくうなずいた。

「そうね、ごめんね、黒川さん。わたしたち、よけいなことしてるかも……」

「ほんとに、ごめんな、黒川。俺……俺たち、もう帰るよ」

亀島は言つて立ち上がった。

「よくはないだろう、亀島君。何も彼女から手がかりは得られていない」
不老翔太郎が、珍しく息を荒げた。

「被害者の俺が『もういい』つて言ってるんだ。黒川は無実だ。次に行こう。誰の家がいちばん近い？」

亀島はほとんど不老を無視して、金銀河と黒川を交互に見て、言った。

こんな場面で、ぼくが言う台詞なんて、あるはずがない。

ただし、傍観するしかないぼくできえ、わかつたことがある。

——亀島佑作は、黒川亜佐美のことが好きだ。

もちろん、亀島は金銀河にも好意を持っているんだろう。しかし、ほんとうに好きなのは黒川なのだ。たぶん、金銀河もそれを知っているし、黒川自身もまた、亀島のことを意識している。

しかし、それを理解していないやつが、この場にやっぱり、たった一人だけいた。

「待ちたまえ、亀島君。君はほんとうにこの事件を解決したいのかい？」

何度目か、数えるのさえ億劫になってしまったため息をついた。

「ねえ不老君、亀島君が言うんだから……それに、わたしも黒川さんの無実を保証するし、次に行かない？」

明らかに、金銀河は冷静さを装っていた。

「ごめんさい。もうすぐ、ピアノの先生がくるから……」

黒川は言った。やっぱり、すぎるような視線を金銀河に向けている。

不老はぼくら全員を見回すと、短く「ふうっ」という息を吐いた。

「了解したよ。では、我々もおいとましよう」

不老が言い、亀島もまた立ち上がった。ぼくも慌てて立とうとしたが、ひどく足が痺れていた。正座は苦手だ。みんなよりも太ももに肉がたつぷりと付いているから、なおのことだ。

「さあ、次は誰にあたってみようか」

「いちばん近いのは、荒畑君の家ね」

金銀河が言う。

「荒畑君については、御器所君の見解を重視しよう。彼が犯人である可能性はゼロではないが、物事には優先すべき順位がある。その次は……」

「ミオの家かな……？ でも、ミオにおかしなこと言い出さないでね、不老君。わたしの大親友なんだから」

金銀河が口を挟んだ。不老は腕組みをして、またも右の人差し指を唇にあてた。前にも見たことのある仕草。こいつの癖なのか？ あんまり見た目にいいものじゃない。格好つけやがって、と思う。しかし、それがさして違和感を抱かせないところが、奇妙だ。

「では、ミオさんの家に行こうか。じゃあ、お邪魔したね」

そう言うと、とつとと部屋を出て行こうとする。が、くるりと機械的に振り返った。あいかわらず、人差し指は唇にあてたままだった。

「亜佐美さん、キッチンはどこかな？」

「キッチンじゃなくてトイレだろ？」

ぼくの声は完全に無視された。

「キッチンは……」

黒川亜佐美は、きよとん、とした表情で助けを求めるような視線を金銀河に向けている。

「おい、不老、もういいじゃないかよ」

亀島が声を荒げる。あ、やつぱり——と思ったけれど、ぼくは口をつぐんでいた。

「無論、一階だね」

「うん……」

黒川亜佐美がおずおずと自室を出て、一階のキッチンへ向かった。ぼくは不老のすぐあとについていた。手を伸ばして不老の着ているシャツを引つ張りたい衝動に、必死に耐えた。

ぼくたちがキッチンに着くと、黒川はますます落ち着かない表情になった。

そこはLDKだった。キッチンとダイニングが対面式になっている。

ダイニング・ルームには花柄のテーブルクロスに覆われたテーブルが鎮座し、四つの椅子が整然と並んでいた。たぶん、お人形さんが食事をするなら、きつとこん

なキッチンだろう。

黒川は、確か一人っ子だ。両親との三人の家族の食卓がそこにはあった。どの席がお父さんで、どの席がお母さんで、どの席が黒川なのか、なんとなくわかるような気がした。

何人もの「大家族」を抱えているぼくの家とは、ずいぶん雰囲気が違う——当然だけど。

「あの……もういい？」

黒川の言葉が聞こえていたはずなのに、あろうことか、不老はキッチンの流しの下の扉を開けた。

「こら、失礼過ぎるだろ、不老！」

ぼくは不老に駆け寄ろうとしたが——足が痺れているのを忘れていた。間抜けな格好で、尻餅をついた。それでも手を伸ばし、不老の肩を掴んだ。

が、細い不老翔太郎の体には、意外にも強い筋肉がついているようだった。ぼくの存在など感じていないかのように、扉のなかを覗き込んだ。

そこには、鍋やフライパンなどの調理用具が整然と並んでいた。

さらに、不老は隣の扉を開けた。そこに並んでいたのは、調味料類だった。さらに不老は立ち上がると、シンクに顔を近づけた。なにやら「くんくん」と匂いを嗅いでいる。

勘弁してくれ。ぼくはじりじりと後ずさった。もうこんな男と友だちだと思われているのはごめんだ。ちらりと金銀河を見やると、金は不老翔太郎の様子に眼をこらしているようだった。

まったく——ぼくは、何度だって言ってしまう。

——なんてこった！

不老は平然とした表情を、黒川亜佐美に向けた。

『フレッシュオレンジの香り』か……なるほど』

「何が『なるほど』だ！ デリカシーがないな、不老は！」

ぼくが言いたいことを言ってくれたのは、亀島だった。不老は、まるで機械仕掛けのように、くるり、と百八十度振り返った。

「いいかい、君の事件を調べているんだ。君からそういう台詞を聞くとは心外だね。が、もう必要な情報はすべて得られた。さて、次に行こうか」

こうもあつげらんと言われると、誰もが「毒気を抜かれる」つていう状態になるのだ。

ぼくとほとんど同時に、亀島が大きく大きく、ほんとうに大きいため息をついた。「さて、次は小幡美桜さんのおうちだね。御器所君のおながが耐えられるうちに、早く行かなければならない」

その瞬間、ぼくは我が身の空腹を思い出した。そしてまた、思い出した瞬間に、例の「ぐおるるるる」が鳴った。

ああ、金銀河の前で、ぼくはいつたい何度腹を鳴らしたんだろう。昔の人は、リアリテイのある言葉を生み出す天才だ——「穴があつたら入りたい」——そんな気分だ。今すぐにでも逃げ出して、消え去りたい気持ちだった。

が、ぼくには逃げる度胸もなかったし、身近に穴もなかった。しかたなく不老たちの後について、黒川亜佐美の家を出た。

「不老翔太郎 最初の挨拶／第三部 梅干しの種五つ・後編」につづく